

ドイツ語において人間名詞句が果たすメトニミー機能¹⁾ The metonymic function of the German noun phrase referring to persons

吉田 有

TAMOTSU YOSHIDA

In this paper, I demonstrate the diversity of metonymic transfers of meaning in German noun phrases referring to persons (henceforth HNP, i e., human noun phrase) that fill the subject or object position in a sentence. I show that the transfers of meaning emerging from HNPs can apply to a variety of phenomena including *physical entities* such as a vehicle (e.g., airplane or car), an apartment or room, or the body and its parts; as well as *mental processes* such as thoughts, feelings, and intentions. I argue that the metonymic function of the HNP deserves a thorough exploration because of its diversity and frequency in ordinary language use.

はじめに

この論考で私が目的とするのは、まず、ドイツ語において「人間を表す名詞句 (human noun phrase、以後HNP)」がソースとなってメトニミー機能により派生する様々な意味のないし指示的な変移をできるだけ広い範囲に捜し求めること、次に、そこに認められる意味のないし指示的な変移の多様性の輪郭をおおまかに画くこと、さらに、その範囲の内部を整理分類することによりドイツ語におけるメトニミー発生源としての人間名詞句に特異性、固有性あるいは独自性があるとすれば、それを特定することである。ただし、HNPからのメトニミー的意味変移に関して英語とドイツ語にかなり共通のものがあること、日本語でも口語の場合に似た現象が存在することがあらかじめ判明しているので、ドイツ語に特異性があるとし

ても、限定的となると予想する。

名詞句とは言語学で慣用されるNPの意味であり、名詞、代名詞、固有
名詞、普通名詞、冠詞の有無、代名詞の種類のかん、単数・複数の別を
問わず、名詞句のあらゆる統語論的な実現形態を網羅する用語として用い
る。その名詞句のうち、ここで議論の対象となるのは、本来、人間（それ
自身）を意味する（はず）あるいは、指示する（はずの）名詞句、すな
わち人間名詞句HNPである。

ここで扱いたい問題を多少とも明確にするために、英語からの例を
(1)に示す。

- (1) a. I am parked out back. (私は奥の方に止めておいた)⁹⁾
b. Ringo squeezed himself into a narrow space. (Geoffrey
Nunberg 1995. 122)
(リンゴは車を狭いスペースになんとか詰め込んだ)

(1a)で「止めておいた」ものは、駐車場という場面から「車」として理解
される。日本語では「私の車は奥の方に止めてある」としても、話者の意図
するところは変わらない。(1b)で himself は、主として文脈から得られる
情報により、「彼自身」から「車」へ意味転換を生じさせる。いずれにせよ、
I も himself も字義どおりには使用されておらず、意味の変移を生じさせ
る。

上のような意味の変移が名詞句にのみ起因するか否か、他の要因が関
係しているのか否かは、については、述部 (predicate)、とりわけ動詞が
重要な役割を果たしていると予測しておく。眼前の発話が置かれている前
後の文脈が関与することもあり得る。

以下での私の論述は、次のような構成となる。第1節で、私がHNPに関
心を抱いた動機と、HNPから派生する意想外の特定化された意味変移と
いう現象をどう解釈してきたかの経緯を述べる。第2節で、私の取り組ん
で来た問題をメトニミー論の領域で再構成するために、適切と思われる定
義について、Hugh Bredin (1984) と瀬戸賢一 (1997) を参照し、その後の
考察の前提とする。次いで第3節で、空間内存在としての人間に関わるド
イツ語における人間名詞句の意味あるいは指示変移が示す諸相を考察す

る。さらに、第4節で、人間名詞句が、単なる空間的存在としての人間でなく、むしろ人間の発話行為、社会行為、心理的側面にも関わる事例を論ずる。第5節では、HNP から派生するメトニミーを集約的に反映するのではないかと期待される、再帰代名詞が生じさせるメトニミーの意味変移を俯瞰して、整理分類する。結論で、HNP がメトニミー論と言語学において何を示唆するかを論じ、この論考をまとめる。

1. ドイツ語における人間志向性

吉田有(1987)で私は、ドイツ語には、人間が関わる事態を表現する文の主格-、対格-、および与格名詞句には人間全体を表わす名詞句を立てる傾向があり、それとは対照的に、日本語では、ガ格-、ヲ格-、二格名詞句に人間全体ではなく、むしろその部分・付属物・派生物を立てる傾向があることに注目した。いくつかの例を(2)に挙げる。

- (2) a. Sie sah *ihn* im Gedränge. (彼女は人混みの中に彼の姿を見た)
 b. *Er* wurde rot. (彼の顔が赤くなった)
 c. Sie beeindruckte ihn mit ihrer Aufrichtigkeit. (彼は彼女の誠実さに感心した)
 d. Sie riefen *ihn*. (かれらは彼の名を呼んだ)
 e. Der rauschgiftsüchtige Französer spielt Klavier, leise kann ich *ihn* hören.³⁾
 (例の麻薬中毒患者のフランス人がピアノを弾いていて、その音がかすかに私の耳に届いてくる。)

(2a)、(2b)では、問題の人物の身体的側面が Ronald W. Langhacker (1993)で触れられている active zone であろう。³⁾ (2c)では、「感心する」対象が彼女自身ではなく、彼女の誠実さという属性にあること、「感心する」が人間の身体ではなく心理的側面に関わる事象であることが注目される。ここでは、瀬戸の言う「分解的な叙述法」も関わっているが、検討は後の機会に譲る。(2d)の「名」は彼と名指された人間の特性である。彼の全人間存在のわずかな部分を指示しているに過ぎないことに注意しておく。(2e)で

私に聴こえてくるのは、ピアノの音であって、麻薬中毒のフランス人自身ではない。(2a) (2e)での下線を引いた人称代名詞が、人間全体を指示していないという意味で、文字どおりに使用されていないことを確認しておく。

以上のような多くの事例、再帰代名詞を含む事例およびその他の事例から、ドイツ語では出来事・事態が人間に関わるものであるならば、その中から人間を抽出し、文法的に際立った位置である主語もしくは目的語の位置に置く傾向があり、それに対して日本語では、それらに相当する位置により具体的な事物・事柄をおく傾向があると判断した。ドイツ語の主格・対格・与格、日本語のガ格・ヲ格・ニ格の名詞句を中心項と名づけ、それ以外の前置詞句、デ格、その他を周辺項と名づけた。ドイツ語では中心項に本来人間全体を表わす名詞・代名詞が立ち、日本語では人間に関わるより具体的な表現が中心項に立てられる傾向があると結論した。無生物主語の構文は、この傾向を部分的に制約するものである。

その後も、主として通俗小説のドイツ語版と日本語版を調査して、日独語対照研究の枠の中で、他の対照項目、例えば無生物主語対人間主語等の事例と共に、類例を集め続けた。その当時、ドイツ語の中心項に立つ人間名詞句は、より具体的、明示的な指示物を捨象する傾向があると考え、その捨象された指示物が日本語でどのように具体的、明示的に表現されるか、そのことに私の関心は傾いていた。ただし、ドイツ語でも、より具体的、明示的に指示物を表現することができる場合が少なくないことには気づいていたのではあるが。

例えば、(3)の例を参照。

(3) a. Sie wurde rot (im Gesicht). (彼女の顔が赤くなった)

b. Endlich war die Frau (mit dem Telefonat) fertig. (ようやく女性性は電話を終えた)

ドイツ語の括弧内の前置詞句は、文脈・状況次第で省略可能であり、日常は省略されることのほうが多い。この点は、「分解的な叙述法」とも関連する表現構造論あるいは発想様式の問題として独自に追求するに値すると私は考える。ここでは系統的に論ずることを差し控えるが、二つの言語の

間に認められる体系的な異同を重視する対照的観点からは重要ではあるので、スペースの許す範囲内で論じてみたい。

中心項に人間名詞句を立てるドイツ語の傾向を、私は「人間志向性」と呼んでいた。その根拠は、池上嘉彦(1982)の中で、英語と日本語を特徴づける際に、スル 的な言語と ナル 的な言語、「BE言語とHAVE言語」と並んで 人間 志向性と モノ/コト 志向性という性格づけが行われていたことである。そこには、次のような例が挙げられており、私の関心を強く惹いた。

(4) We are closed on Sundays. 日曜日閉店

(5) You have stains on your coat.

君ハコートニシミガツイテイル(ヨ)。

また、池上嘉彦(1989)には、(6)が挙げられている。

(6) We are sold out. 全部売り切れ

これまで見てきた例 (1)から(6)まで で特徴的に思えたのは、(i) 英語にせよドイツ語にせよ、表現に字義どおりの解釈を与えようとするとき多かれ少なかれ非論理性が認められること、(ii) 日本語の翻訳者がたびたび名詞句の人間と近接 (contiguity) 関係にある、より具体的、明示的な語を補うことである。これは、対照言語学の視点から興味のあることではあるが、この論考では考察の手掛かりにするに留める。

次節で、メトニミーの定義を必要な程度に明確にした後に、第3節で、より多くのドイツ語におけるHNPから派生するメトニミーを精しく見ることにする。

2. メトニミーの定義

80年代以降、認知意味論あるいは認知言語学と呼ばれる言語研究の分野が急成長し、その枠内で、伝統的にレトリックの中で考察されてきた広義のメタファー(比喩)が脚光を浴びることとなった。このメタファーが

言語学という土壌でやはり精力的に研究され、そのメタファー論の中から近年メトニミーが多くの注目を浴びる状況となっている。急速かつ集中的なメタファーおよびメトニミーの研究と議論は、しかしながら、いまだ収束の過程に向かっているとは思えず、議論に加わる研究者の輪と、議論の論点の輪は広がりつつづけているように見受けられる。

メタファーとメトニミーの間の境界が次第に明確になりつつあるものの、メトニミーとそこに含まれる下位の種と見なされるシネクドキの境界を原理に基づいて区画できていない現状を打開しようとする試みが瀬戸賢一(1997)である。

ここでは、現代の比喩研究において一方のメタファーと、他方のメトニミーならびにシネクドキとの区別はひとまず確定されたと見なし、従来メトニミーの一種と見なされてきたシネクドキを独立した転義の類として立てる説が展開される。

瀬戸のメタファー、メトニミー、シネクドキのそれぞれの定義と、それら相互の関係は、おおよそ以下のように要約できる。

1. メタファーは類似性 (similarity) に基づく。

Time is money. 「時は金 (のように貴重) なり」においては時間と金銭の間に貴重なものという類似性があり、それに基づいてメタファーが成立する。

2. メトニミーは現実世界に存在する「モノ」相互間の隣接性 (contiguity) に基づく。ここで「モノ(entity)」とは空間的、時間的、抽象的な個別存在を意味する。例えば、

(4) He's always chasing skirts.

彼はいつもスカートを追っかけている。

この例でスカートにより女性が意味され、理解されるのは、スカートが女性をよく着用するものとして、スカートという「モノ」と女性という「モノ」との間に隣接関係が存在することによるのであり、スカートと女性との間に類似性があるからではない。そこで「メトニミーとは、(現実)世界の中での隣接関係にあるモノとモノとの間で、

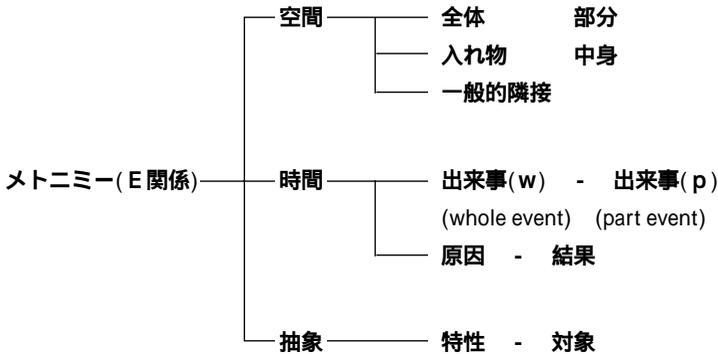
一方から他方へ指示がずれる現象のことを言う」という定義が導かれる。

3. これに対して、従来メトニミーの一種とされてきたシネクドキは、カテゴリーの包摂関係に基づく意味の伸縮現象であり、隣接関係に基づくメトニミーと区別されなければならない。包摂関係とは、包摂分類法(taxonomy)におけるカテゴリーの上位下位関係である。

例えば、松という木は、木の種類として、木のカテゴリーに含まれるが、松は木の一部ではない。松という種は下位カテゴリーとして、上位カテゴリーである木という類に包含されているのである。隣接関係は、文節分類法(partonomy)におけるAはB「の一部」、例えば「腕は体の一部」、の関係であり、この二つの分類体系が原理を異ににすることに留意すれば、メトニミーとシネクドキがそれぞれ独自に認定されなければならない転義表現の種類であることが帰結される。「花見」はなんらかの花ではなく桜を見に行くのであり、「パンを稼ぐ」はパンだけではなく、生活の糧一般を得るために働くことである。

ここでひとつ確認しておくべきことがある。ある言語表現には、言語内在的な意味が付与され、その意味に基づいてその言語表現は、言語外在的な現実世界のモノを指示する効果を有する。そこで理論的には、言語表現の意味と、言語表現により指示される現実世界内の事物とは厳密に区別されなければならない。以下の記述において、このことをつねに念頭に置くが、誤解の恐れがない限り、意味と指示物との煩瑣な区別を問題にしない。

ここで瀬戸賢一(1997)のメトニミーの分類を図式的に掲げる。



他方、Hugh Bredin (1984) は、同様にメタファー、メトニミー、シネクドキの分類基準を論じているが、それぞれの定義内容は瀬戸と部分的に異なる。その定義は、根拠付けの議論を省略して、核心部分を要約すれば以下ようになる。

1. シネクドキの関係は、構造的 (structural) あるいは内在的 (intrinsic) である。

例えば、wheels (車輪) はan automobile (自動車) を意味するシネクドキである。⁴⁾ 車輪が自動車の構造的部分であるところからこの意味転換が成立する。

2. メトニミーの関係は、外在的 (extrinsic) かつ単純 (simple) である。
例えば、Virgilという創作者 (inventor) とその創作物 (invented) の間の関係は外在的であり、単純あるいは直接的である。

3. メタファーの関係は、類似性 (similarity) に基づき、依存的 (dependent) である。

例えば、Man is a wolf というメタファー表現で、人間と狼の間関係は、外在的であるが、いかなる点で両者が類似しているかが直接的に明らかでない。他者との関係で獐猛になる本性を有する、と解釈する場合には、周囲の同類に対する行動様式の観点という間接的な基準を導入してはじめて両者の類似関係が確定する。この意味で、メタファーで結ばれた関係は、観点依存的である。

Bredinのメトニミー考察の動機は、メタファーには詳細かつ浩瀚な探求が向けられているのに対して、それより日常的に広範囲に存在するメトニミーにはそれが行われていない、また、メトニミーとシネクドキの関係も曖昧なままである、という認識であった。古典的修辞学、Group μ 、Roman Jakobson (1956) などの説を批判的に検討しつつ上のような定義を提案するに至った。

定義を吟味するに際して、Bredin は、修辞学者もしくは専門辞典を参照してメトニミーの典型的な類型の一覧を作り、所説を展開している。以下の考察に利用できる部分があるので、全部で11項目にわたる一覧から後に触れるものだけをここに掲げる。

- | | | |
|---------------|-----------|---|
| 1 . Cause | Effect | (a) War is sad.
(b) She is my pride and joy. |
| 2 . Inventor | Invented | (a) She was reading Virgil.
(b) An enterprising scheme. |
| 9 . Possessor | Possessed | (a) The violinist broke a string.
(b) The smart money |
| 11. Concrete | Abstract | (a) A soldier is the Enemy of mankind.
(b) Youth is giddy and irresponsible. |

3 . 空間内に存在する人間

人間は、身体をそなえ空間を占める存在である。ふつう住居に住み、建物の中で働くことが多く、乗物という空間的なものを利用することもしばしばである。

次の例では、いずれもドイツ語で人間を意味する名詞句が主語に立てられているにも拘わらず、日本語の翻訳では、それぞれの人物が載っている乗物が主語として現れている。(以下で作品名は重要でない場合は、随時割愛ないし略記する)

- (7) Die Präsidentin fuhr in Richtung Kapitol los. 『大統領』 S.14
大統領を乗せたリムジンが議事堂目指して走り出した。
- (8) Kurz nach zwölf Uhr landete Schakal auf dem Brüsseler National-Flughafen.
ジャッカルの乗ったジェットは、12時過ぎに、ブリュッセル・ナショナルに着陸した。『ジャッカル』
- (9) Zwei Stunden später rollten sie die Canal Street in New Orleans entlang und stiegen an der Ecke Magazin aus dem Bus. John Grisham, *Das Jury*, S.282
二時間後、バスはニューオーリンズのキャナル・ストリートを走っていた。バスが止まり、一同はマガジン・ストリートとの交差点に降り立った。『陪審判決』白石朗訳 新潮文庫 253 254頁
- (10) Two hours later they rolled along Canal Street in New Orleans, then they exited the bus at the corner of Magazine. John Grisham, *The Runaway Jury*, p.253
(ドイツ語でも原作の英語でも、rollen (=roll) したのは「かれら、つまりバスの乗客たちであるが、日本語では「バス」となっている。)

これまで私は、上のような例について対照言語学的な観点から、日本語では自然な乗物がドイツ語では捨象 (substruct) され、乗物とそこに乗っている人物たちとい全体的存在のうち、人物たちが抽象あるいは抽出 (abstract) され、主語として立てられている、と考えていた。池上嘉彦 (1982) が「英語には人間志向性があり、対する日本語にはモノ/コト志向性がある」と両言語を特徴づけるのに従い、ドイツ語と日本語にも同様の特徴が認められると考えたのである。このこと自体は、言語表現類型論あるいは対照言語学の立場から見て、誤っていないと思う。しかし、これらの事例をメトニミーの観点から見直すと、人間がソース (source) あるいは基底 (vehicle) となつて、それに空間的に隣接する乗物がターゲット (target) あるいは主意 (tenor) となつていると見なすことが可能だと、暫定的に、考えておく。その理由は、乗物は、一般に人間の移動のために存在する手段であり、そこには乗物と乗客あるいは利用者とは並存する、さらに操縦

者、運転者が重要になる場合もありうる、この並存する全体からは、乗物、乗客、操縦者のいずれかが全体の代表、代理として言語的に表現されることが可能であるが、乗物と乗客あるいは操縦者を、つねに共に表現するのは煩わしいだろう、と思うからである。

人間を全体の代表または代理とした場合、一方の乗物と、他方の乗客または操縦者との関係は、全体と部分の関係であろうか。あるいは、容器とその中身の関係とも解釈できようか。この疑問に答えを出すのは、他の例も見てからにしよう。

ここで、ケーススタディとしてF.フォーサイス『シェパード』(Frederick Forsyth, *Der Lotse*, München 1986 (DA©1975) Originalausgabe: *The Shepherd* 1975.日本語版: 篠原慎訳 角川文庫 2000 16版(昭和57年初版))の中で、ドイツ語でジェット戦闘機とそれを操縦するパイロットのどちらが飛行行動の主体として扱われるか、を調べた結果の一部にコメントを添えて掲げ、考察の参考としたい。

(11) Mit anderen Worten, ich wußte, wie hoch und wie schnell ich flog. S.22

(言い換えると) 乗機がどれだけの速さでどれだけの高さを飛んでいるのかということしか、わたしにはわからなかったわけである。

109頁

ドイツ語の従属節で「飛んでいる」のはichであるが、日本語ではそれは「乗機」となっている。速度や高度は航空機に関わるもので、操縦者に関わるものでないと日本語では理解されているのだろうか。しかし、「自分がどれだけの速さでどれだけの高さを飛んでいるのか」という表現は日本語でも可能であろうように思われる。

12 吉田 有

(12) Dort würde ich, wenn die Leutchen nur genügend Verstand hätten, sobald sie mich in geringer Höhe über dem Flugfeld im Warteflug hin- und herdonnern hörten, sicher landen können. S.25

わたしが基地の上を低空で旋回すれば、その音を聞きつけた要員たちが滑走路のライトをつけてくれるかもしれない。そうなれば無事に着陸できるのだが.....110頁

ドイツ語従属節でhörenの目的語はmichであるが、日本語では「その音」となっている。「わたしを聞きつけ」は日本語では不可である。

(15) Die Vampire stand. S.44

ついにヴァンパイアは停止した。128頁

「ヴァンパイア」は戦闘機の機種名であるから、ドイツ語と日本語はパラレルである。

(16) Als wir uns von der Vampire entfernten, sah ich, daß ich hart am Ende der Landepiste zum Stehen gekommen war, 20 Fuß vor einem Sturzacker. S.48

遠ざかる車の中からヴァンパイアを振り返ってみた。それは滑走路の先端近く、畝の入った畑まであと20フィートというところで辛うじて停まっていた。131頁

「辛うじて停まっていた」のはドイツ語ではichであるが、日本語では「それ」すなわち「ヴァンパイア」である。この状況では、「私」はすでに乗機を降り、飛行場内移動用の車に乗って遠ざかりつつ乗機を振り返って眺めているのだから、このichには違和感を覚えざるを得ない。これがなお乗機を指すとすれば、ichと乗機の関係は所有者と所有物の関係とでも考えなくてはならない。

- (17) ... Als ich dann die Feuer an der Pistenbegrenzung sah, konnte ich allein landen. S.50
「... で、滑走路のライトを見つけて、着陸したってわけです」
134頁

着陸したのは、ドイツ語でも日本語でも操縦者。

- (19) Wo genau liegt R.A.F-Minton? fragte ich ihn.
Wir liegen hier fünf Meilen landeinwärts von Cromer. , sagte er. S52
「このミントンの正確な位置は？」
「クローマーの海岸から5マイル、内陸へ入ったところだよ、ここは」137頁

これは飛行行動と直接の関係はないが、興味深い例なので挙げる。主人公の質問に答える人物は、ドイツ語では「英国空軍ミントン基地」をwirと表現しているのに対して、日本語では「ここ」となっている。人間名詞句が、人間の所属する機関を経由して、その機関の建造物と土地を含む施設を指示していると考えられる。これは、人間名詞句から変移した意味として重要なもののひとつである。

これと似た英語の例がGeoffrey Nunberg (1995) に掲げられている。

- (20) a. I am in the Whitney. (私の絵がホイットニー (美術館) に展示されている)
b. We are in Chikago. (わが社 (の本店/オフィス) はシカゴにあります)

(20a) では人間の作品がある場所、(20b) では人間が所属する組織の空間的側面である建造物の所在地を告げている。

自動車とその運転者が走行している場合、日独語でどのような表現上の異同があるかを調査しようと、オーディを運転して高速道路を友人宅へ向かう女性が怪しい黒塗りのヴァンに付きまといられるという短編小説も参

照した（調査資料：Jeffrey Archer, Halten Sie nicht auf der Schnellstraße an!, Bergisch Gladbach 1995 Englisches Original ©1994 日本語版「高速道路の殺人鬼」(『十二枚のたまし絵』(永井淳訳)新潮文庫1994)。次のような事例を見つけた。

- (21) a. Als sie auf die Straße hinauffuhr, ... S.216
(彼女が車で) 通りに出ると、... p.257
b. Vorsichtig fuhr sie rückwärts zur Stelle, ... S.220
... (彼女は) ゆっくり車をバックさせた。 p.261
c. Diana hatte wieder auf achtzig beschleunigt, ... S.221
(ダイアナが) ふたたびスピードを時速50マイルまであげたとき、
... p.262
d. Sie fuhr langsamer, um das andere Fahrzeug vorbeizulassen,
... S.221
その車に追い越させようとして (彼女が) スピードを落としても、
... p.262

これらの例では、ドイツ語では動詞 fahren, beschleunigen により、女性が車を運転して移動していることが誤解の余地なく含意されている。日本語でも、短編全体を見れば、文脈に支えられて、車を潜在化させ、あたかも女性だけが走行したいかのように描写しているところが少ない。

女性の車につきまとう黒塗りのヴァンは、それに乗っているのが黒革のジャケットを着た若い男と判ってからは、ドイツ語ではerないしihnと表現されることが多くなるのが認められた。

- (22) Sie beschloß, Gas zu geben, um ein wenig Abstand zu ihrem Verfolger au gewinnen, aber er blieb hartnäckig hinter ihrer Stoßstange. S.221
もっとスピードを上げて、後続車との間隔を広げようとしたが、その車は彼女のバンパーから数ヤード以内にびったりついてきた。
p.262

ドイツ語の下線部の名詞句は「追跡者、迫害者、ストーカー」を意味するものだが、日本語訳で「後続車」となっているのが注目される。

次の例のように車が捨象されて、人間が走行行動の主体として取り立てられることは、ドイツ語と日本語で共通している。

(23) Sie fuhr langsam, er fuhr langsam. Sie beschleunigte, er beschleunigte. S.221

彼女がスピードを落とすと、相手もスピードを落とした。彼女が加速すると、相手も加速した。 p.263

上に見られるように、主人公の女性の走行行動は、ドイツ語、日本語ともにその女性を主語として述べられることが多い。ただ、ドイツ語で「加速」「減速」「バックする」などの行動を運転している女性を主語として、自動詞で表現しているのに対して、日本語では「スピード」「車」などの近接名詞を顕在化させて目的語として取り立てていることが注目される。

ドイツ語の動詞fahrenおよびその周辺の自動車操縦に関わる動詞には、移動手段としての車、操縦の対象としての車が潜在していると考えることができる。また、これを次のように顕在化することもできる。

(24) a. Ich fahre mit dem Auto zur Arbeit. (僕は車で通勤している)

b. Sie fährt einen roten Porsche. (彼女は赤いポルシェを乗り回している)

戦闘機の場合と比べると、乗用車を人間が運転している走行行動については、日本語でも乗物を捨象することがそれほど不自然ではないように思われた。

自動車に関しては、以下のような事例も興味深い。

(25) a. Sie streifte den rechten Torposten. 彼女は(車で)右側のゲートポストを掠った。

b. Könntet ihr mich anschieben? (エンストした)車を押してもらえないかな。

日常のコミュニケーションにおいては、文脈を頼りに論理的にはいささか不正確な表現をするのは、いずれの言語の場合でも観察されるに違いないと考える。しかし、上で見てきた例からは、日本語の観点からすると「論理的に不正確な表現」の在りように異なる部分があると言える。

4 . 身体とその部分

人間が身体をそなえた動物であるからには、HNPが身体全体あるいは、そのいずれかの特定部位のみを指示している場合があることは予想できることである。

(2 b) Sie wurde rot. (彼女の顔が赤くなった)に見たように、人間名詞句が、実際には身体部分である顔を指示している例は、他の身体部分に比べて比較的多い。

- (26) a. Mark starrte ihn verständnislos an. 『大統領』 S.232
マークはわけがわからずに相手の顔を見つめた。334頁
- b. Dein Kinn kratzt mich. 『大統領』 S246 ひげで顔がちくちくするわ。356頁
- c. Mark erblaßte. S.158 マークの顔が青ざめた。
- d. Mark wagte nicht, sie anzublicken. 『大統領』 S.215
マークはいまだに彼女の顔を正視できなかった。309頁
- e. Er schaute Elizabeth an. 『大統領』 S.180
マークはエリザベスの表情をちらとうかがった。
- f. Sie sehen blaß aus. (S.Sheldon, Das nackte Gesicht, München 1992, S.28)
顔が真っ青ですよ。(大庭忠男訳)『裸の顔』ハヤカワ文庫1988、p.39

ドイツ語では顔色を表現するときに、概ねdas Gesichtは潜在化されるけれども、顕在化するとしても Sie war weiß im Gesicht のように前置詞句になり、瀬戸 (1997) の言う分解的構文の一部となって現れることは上で既に指摘した。次の例も顔に近い部分を指示している。

- (27) a. Der dicke Mann strahlte. 太った男はにっこり笑った。
 b. Er war an den Schläfen bereits ein wenig weiß.
 彼のこめかみには白いものが混じっている。

(27a) の「笑った」は顔、それも口の周辺部分の身体行為である。(27b) では「こめかみ」がドイツ語でも前置詞句で明示されており、分解的な叙述法の例でもあるが、weißという特性があくまでもErのものであると表現し、an den Schläfenは細部規定となっている。さらに言えば、「こめかみ」そのものに「白いもの」が混じっているのではなく、そのあたりの髪に混じっているのである。

身体部分だけではなく、HNPにより着用物も指示される場合があるのは興味深い。

- (26) Wie spät haben Sie? S.237 (君の時計で) いま何時だ？

この例は、腕時計が暗黙のうちに指示されているが、着衣と同様に身体の一部のように理解されているのかもしれない。瀬戸の挙げている例が想起される。

- (27) “The church clock chimed. I looked at my watch and found I was a minute slow...”
 --- A. Critie, *The ABC Murders* 瀬戸97 . 118

再帰代名詞のHNPからの意味変移の例として「服」が現れる場合を後の第6節でみる。

これまでの事例から、HNPが乗物と着用物を含めて身体部分とに意味変移することがドイツ語で可能であることが確認された。部分的には、英語、日本語でもそれが可能である。

メタファー、シネクドキと並んで、メトニミーも言語一般に、しかも詩的言語に限られず日常言語でも多く見られる言語現象であるという認知意味論の主張は、その限りでは、正しいと結論することができる。

5 . コミュニケーション

人間は言語を操る動物である、とえば、いささか陳腐な言葉に聞こえる。しかし、発話行為理論が60年代から哲学者たちにより提唱され、文字どおりの言語内的意味を扱う意味論に語用論の章を並べるのが言語学入門書の慣例となり、また80年代に始まる現代のメタファー論にも大きな影響を及ぼした、と私は見ている。伝統的な形式論理学が命題（平叙文）、言い換えれば、真偽を問うことができる文しか扱ってこなかった状況が打破されたことも、語用論のもたらした大変に重要な事件だったと考える。なぜなら、人間と人間が相互に行為し合うとき、つまり人間が社会的に振舞うとき、言語を通してそれが可能になっている、と思うからである。動物と共通の行為、例えば摂食行動など、もあるが約束、お詫び（謝罪の表明）お礼（感謝の表明）などの典型的に人間の間の行為は言葉でしか遂行できないと考えるからである。

前置きが長くなった。具体的事例に話を移そう。

これは英語またはドイツ語の学習者にとって馴染みある例であるが、

- (28) a. Verstehen Sie mich? 私の言うことが分かりますか。
b. Hörst du mich? (私の言葉 / 声) 聞こえているのか。

発話内容や声は、人間のコミュニケーションに関わるものである。それに関係するメトニミーは他にも見つけることができる。

- (29) a. „Verzeihung, daß ich Sie unterbreche, Mr. Leykam - aber ...“
『大統領』 S.175
「お話しの途中ですが、ミスター・ライカム、...」
b. Will you be long, Halt? (President p.52)
c. Brauchen Sie noch lange, Halt? (話は) 長くかかりそうな、ホールト?
d. „Wie klang der Mann?“ J.Archer, *Attentat*, Hamburg 1988, S.24
「そいつの話し方はどんなだった?」『大統領』 p.28

e. „Wo war ich stehengeblieben?“ 『大統領』 S.60

「どこまで話したかな？」 p.81

(29e) では、ドイツ語は、字義通りには「わたしはどこで立ち止まったのか」を言っている。上司と部下の会話中に第3者が現れ、中断した話がどこまで進んでいたかを上司が部下に訊いている場面。ドイツ語の主語の ich は省略され、「話す」とい動詞形ではあるが、ドイツ語では背後に潜在していた「話す」という行為が日本語で顕在化している。

ところで人間とその発話との関係は何であろうか。

人間は、身体をそなえた空間的存在であるが、感情を経験し、思考を働かせ、発話という人間固有の行為を行う存在でもある。この主として心的生活の側面は時間軸の上で進行していると考えることができる。そこで瀬戸 (1997) の図式に従うと、人間とその言語活動は、空間的な隣接性ではなく、時間的な隣接性で結ばれていると考えるのが妥当である。しかし、人間と発話行動は出来事と出来事の関係ではあり得ない。そこで、時間的隣接性のもうひとつのカテゴリーである原因と結果の関係ではあるまいかと考えてみる。すでに述べたように、人間にはふつう感情を体験し、思考を進め、言語を使用して他者とコミュニケーションを図るという特性と能力を具えている。この特性と能力が原因である。そして生活の場面々々で状況に触発されて、あるいは、自分の意志でそれらの精神的体験を経験し、あるいは、積極的に思考活動、発話活動を行うという結果が生じてくる。今のところこれ以外の解釈を思いつかないので、ここでの人間と感情、思考、発話との関係を「原因 結果」の関係と見なしておく。

社会的存在としての人間にとって、特性としての名前はアイデンティティの基礎になる重要なものである。HNPとしての代名詞から意味変移により名前が指示される例は少なくない。

- (30) a. Sie stehen nicht auf der Liste. お宅様(のお名前)は招待客リストに載っていません。
b. Sie trug sich in die Teilnehmerliste ein. 彼女は参加者名簿に署名した。
c. Er konnte ihn von seiner Liste streichen. 『大統領』S.164
マークは彼を(容疑者)リストから除くことができた。

ここで瀬戸に挙げられているI'm not in the phone book. (瀬戸1997、164) が思い起こされる。

次節で再帰代名詞がコミュニケーションに関わる例も見るようになる。

コミュニケーションに関係するが、これまでの例とは種類を異にする次の例は注目に値する。

- (31) Ich könnte dich um zehn auf eine halbe Stunde einschieben.
J.Archer, *Endspiel*. S.72
(I could fit you in at ten for half an hour. p.78)
10時から30分間なら都合がつくよ。「終盤戦」『十四の嘘と真実』
新潮文庫85頁

ここでdich einschieben(君を割り込ませる)というのは、面談を申し込まれた「私」がその日のスケジュールの上で相手との面談をある時間帯に割り込ませるという意味なのである。このケースは、コミュニケーションに関わるだけでなく、面談を取り決めるという社会的行為に関わっている点で重要である。相手の人物duと面談との関係も「原因 結果」と捉えておく。

6. 再帰代名詞における人間

再帰表現を用いた文を適切に収集し、分類すると、人間名詞句がメモミー機能によりその人間自身以外のものを指示する範囲を、ほぼ全体的に、示してくれるように思う。

- (32) a. Elizabeth ordnete sich in den Verkehr auf der Sechsten Straße ein. 『大統領』S.228
エリザベスは六番ストリートの車の流れに合流した。
b. Ich muß mich neu einrichten. 部屋/アパートに新しく家具を調えなくては。

上の例は、乗物と住居を指示するものである。HNPが人間を取り囲む空間物を指示していると言える。

身体の全体あるいは部分が再帰代名詞により指示される例は実に多い。

- (33) a. Er setzte sich auf den Stuhl. 彼は椅子に腰を掛けた。
b. Sie legte sich auf dem Bett. 彼女はベッドに身を横たえた。
c. Er erhob sich vom Platz. 彼は座席から腰を上げた。
d. Sie wusch sich. 彼女は顔/手を洗った。
e. Er beugte sich höflich. 彼は懇懇に腰をかがめた。
f. Sie kämmte sich in Ruhe. 彼女はゆっくりと髪をとかした。
g. Der Junge hat sich wieder beschmutzt. 男の子はまたも洋服を汚した。
h. Anna hängt sich bei mir ein. アナはわたしと腕を組んだ。

最後の例は、瀬戸にある英語の例: She slipped her hand through his arm. (瀬戸97. 102) と似ているが、her handはドイツ語でsichにより、through his arm は bei ihmで表わせる。

コミュニケーションあるいは発話に関する例も多い。

- (34) a. Er äußerte sich nichts zu dieser Angelegenheit. 彼はこの件について発言を控えた。
b. Sie faßte sich nur kurz. 彼女は手短かに話をした。
c. Er hat sich versprochen. 彼は言い間違いをした。
d. Die alte Frau wiederholt sich in letzter Zeit. 老婦人は近頃繰り返し言う。

以下では人間の心的側面に関わるものを見る。まず、思考に関するものがある。

- (35) a. Er hat sich anders überlegt. 彼は考えを変えた(気が変わった)。
b. Sie hat sich geirrt. 彼女は思い違いをした。

次に、感情にかかわるものがある。

- (36) a. Wir haben uns sehr über das Geschenk gefreut. 贈り物を心から嬉しく思いました。
b. Ich freue mich auf deinen Besuch. 君の来るのを心待ちしている。
c. Sie ärgerte sich über seine Bemerkung. 彼の言葉に彼女は腹を立てた。
d. Das Paar amüsierte sich den ganzen Abend beim Tanz. 二人は一晩中ダンスをして心を楽しませた。
e. Er störte sich nicht an meiner kritischen Bemerkung. 彼は私の批判的な言葉に気分を害することもなかった。

再帰動詞ではないが、次の動詞群も人間の感情面に働きかける意味を共有している。

- (37) jmdn. ermutigen勇気づける/ entmutigenがっかりさせる/ trösten 慰める/ ermuntern元気づける/ verletzen心を傷つける/ empören憤らせる/ betören (魅力で) ぼおっとさせる/ faszinieren魅惑する

意思決定に関わる例。

- (37) a. Haben Sie sich schon entschlossen, Sir? 『大統領』 S.146 (注文の料理は)おきまりですか。
b. Sie konnte sich nur schwer entscheiden. 彼女はなかなか決心がつかなかった。

ドイツ語において、人間を主語とする文の再帰代名詞は、主語により指示された人間と同一指示の関係にあり、同一人物を指示しているはずである。しかし、以上に見てきた通り、再帰代名詞は、その人物が乗っている乗物、住んでいる住居ないし部屋、その人物の身体全体あるいは身体部分、身体の延長としての衣服、等、人間の空間的側面に関わるモノを指示することが出来る。さらに、精神的側面ないし心的側面である感情、思考、意志を指示することもでき、その側面の外的発現としての発話、それに関わる社会行為までを指示する場合があることさえあることが判った。

とは言え、ここで判明したことは日本語との対照的考察の結果である。上に見てきた類の事例が、字義通りの意味でなく、それぞれの文脈でメトニミー的な意味を派生させていることを主張するためには、再帰代名詞についての言語学的な根本的究明と、メトニミーの定義の吟味を必要とするように思われる。関連する文献を二、三調べてみたが、意味論的な考究は未だ行われていない。

古代ギリシャの賢者が述べたと言う、Erkenne dich selbst! 「汝自身を知れ」という格言においては、人間のすべて、すなわち生物学的、解剖学的、生理学的、心理学的、理性的、意思的、その他のあらゆる側面を統合する人間という存在の全体が dich により暗示されている。これに対して、日常的に用いられている再帰代名詞には、そのような全体的人間が意味されていることは、ほとんどないのではないかと言うのが、ここでの結論となる。

おわりに

事例の紹介にかまけて、言語学的ないし意味論的議論が手薄になったかも知れぬが、ドイツ語における人間名詞句HNPがメトニミー作用により多様な意味ないし指示変移を生じさせることを示し得たと考える。航空機、自動車、住居、部屋など、人間を空間的に包括するモノを指示することができ、全身、身体部分のみならず、発話、言葉、思考、感情、意志、など心的側面をも指示することができること、さらには「面談」のような社会的行為をも指示しうることを示唆することができた。

HNPが、一方で、空間的に人間を包むもの、身体をそなえた人間の全身

またはその部分に指示を移している場合には、空間的隣接性が基盤となるメトニミーと解釈されよう。しかし、他方で、心的側面に指示が移動するケースでは、空間的隣接性で説明することはできない。人間は、感情を抱き、思考力・意志を働かせることのできる存在であり、言葉を操る存在である。そのような性質と能力をそなえた人間が「原因」となり、それらの性質・能力が発現して感情が喚起され、思考・意志が働き、発話が行われるとすれば、これらは「結果」と見なすことができる。そこで、HNPが心的側面に指示を移している場合には、原因と結果の関係を基盤とするメトニミーと解釈することができる。まだ細部を厳密に議論する余地が残されているが、HNPが空間的隣接性と、原因と結果という時間的隣接性とに基づいて、多様な意味のないし指示的変移を生じさせる、ということはこの論考の結論とする。

ここで何回か触れた「分解的叙述法」について、簡略に考察を行い、この論考を締め括りたい。次の例において、ドイツ語の文は、文脈が不明であれば曖昧なものとなり得る。

- (39) a. Wann bist du heute fertig, Liz? 今夜は何時に仕事が終わるんだい、リズ。
b. Endlich war die Frau fertig. ようやく婦人が電話をかけ終えた。
c. Du hast recht. 君の言う通りだ。
d. Ich lag schief. 私の考えは間違っていた。
e. Sie wurde rot. 彼女は顔を赤らめた。
f. Er küßte sie. 彼は彼女にキスをした。
g. Sie schlug ihn. 彼女は彼を殴った。

文脈情報が不十分な場合、ドイツ語では、前置詞句を補って文意を明確にすることができることを (40) の各例が示している。

- (40) a. Wann bist du heute mit dem Dienst fertig, Liz ?
 b. Endlich war die Frau mit dem Telefonat fertig.
 c. Du hast mit deiner Vermutung recht. 君の想像した通りだ。
 d. Ich lag mit meiner Annahme schief. 私の仮定は誤っていた。
 e. Sie wurde rot im Gesicht. 彼女は顔を赤らめた。
 f. Er küßte sie auf den Mund. 彼は彼女の口にキスをした。
 g. Sie schlug ihn ins Gesicht. 彼女は彼の顔を叩いた。

ドイツ語においては、人間に関わる事態を文として言語化する際に、まず人間を主語に立てる、関わる人間が複数存在し、主体と客体の関係にあれば、一方を主語に、他方を目的語に立てる。その上で、必要があれば、どの点について、あるいは、どの部分についてという詳細規定ないし細部規定を前置詞句によって言語化する。そのような文構成に関する規則性がドイツ語に(おそらく英語にも)存在すると思われる。この「分解的叙述法」がどの範囲で、どの前置詞を手段として適用されるかは、今後の研究課題とするに値する問題であると思う。

註

- 1) 2003年7月27日の上智大学国際言語情報研究所設立25周年記念行事の一環として「メタファー・シンポジウム」が開催され、そこで「ドイツ語人間主語構文のメタファー性」を報告した際、私は自分が注目してきた言語現象がメトニミーの問題であるとの指摘を受け、私が興味を持ち続けてきた問題、集めた事例を改めてメトニミーの問題として整理してみたい、というのがこの論考を書く動機となった。私の報告にフロアーからコメントを加えてくれた高橋由美子教授、総括者を勤めコメントを下された瀬戸賢一教授に感謝を申し上げる。
- 2) (1a) を瀬戸賢一 (1997) で初めて見たが、その後G. Nunberg (1995) その他でもたびたび見かける。Nunbergで初出したと想像する。(1b)もNunberg (1995) から。
- 3) Langacker (1984) が入手できなかったのでLangacker (1993) に依った。

Methodenkritische Studien am Beispiel der deutschen Reflexivverben. München : Max Hueber.

Taylor, John R, 1989. *Linguistic categorization: prototypes in linguistic theory.* New York: Oxford University Press.

Weinrich, Harald, 1993. *Textgrammatik der deutschen Sprache.* Mannheim:

Weinreich, Uriel, 1966. Explorations in Semantic Theory. In: Sebeok(ed.) *Current Trends in Linguistics 3*, The Hague, 395-477.